

山と博物館

第46巻 第11号 2001年11月25日

市立大町山岳博物館



大町山岳博物館創立50周年記念シンポジウムにて (2001.10.13)

約800名の参加者を前に6名のパネリストがそれぞれの視点から山の魅力を語り、今後の博物館活動へ提言を行なった。

創立五十周年記念式典・

記念シンポジウムを開催

大町山岳博物館

大町山岳博物館では十月十三日、創立五十周年を記念した式典ならびにシンポジウムを大町市文化会館で開催しました。

記念式典では、腰原大町市長が式辞を述べ、当館の倉科館長より「博物館の五十年」の歩みについて紹介しました。また、来賓の皆様よりご祝辞をいただいた後、博物館創設期よりご尽力いただいた方々へ感謝状の贈呈を行いました。これに引き続き、創設期の博物館活動に携わったおひとりである内山慎三氏より、「大町市における山博の役割」と題した記念講演を行っていただき、記念式典を閉じました。

午後からは、記念シンポジウムに先立ち、記録映画「特別天然記念物 ライチョウ」(日本シネセル撮影、一九六七年制作)を上映しました。この映画は当時、教育啓発映画(文化映画)として文化庁が制作に乗り出し、当館が制作に協力した作品で、文部省特選映画として映写されたものです。

記念シンポジウムでは、「人・岳・博物館 新たな知の仕組みを考える」のテーマのもと、今井通子氏、中村浩志氏、野口健氏、平林克敏氏、湯浅道男氏、当館の柳澤昭夫専門指導員といった登山家や自然科学者など六名のパネリストが、それぞれの立場から山の魅力を語り、今後の山岳博物館が果たすべき役割や取り組みについて貴重な提言をいただきました。

シンポジウムには、大町市民の方々を中心に約八〇〇名の参加があり、盛会のうちに幕を閉じることができました。式典・シンポジウムに参加された方々、ならびに開催にご協力いただきました実行委員の皆様や関係者の方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

スイスアルプス博物館から寄せられた資料

(後編)

関 悟 志

3. 寄贈資料について

A. 日本人登山家に関する資料

d. ホテル・ベルビューの宿帳に残る日本人登山者の記述

標高一〇五〇mの高地に位置し、アイガー北壁をめぐる登攀によって知られる村、グリデルワルト。この村で長い歴史を持つ老舗ホテルが「ベルビュー」である。現在でも世界各国の著名人が宿泊するこの五つ星ホテルは、日本人登山者や旅行者にも古くから利用されてきた。

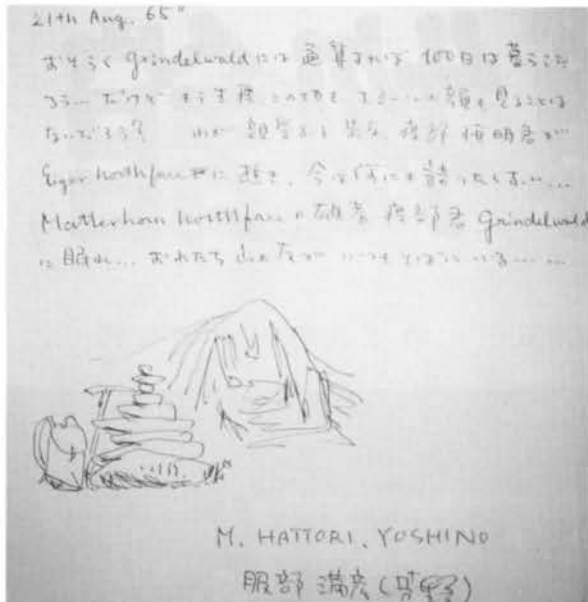
このホテルに荷を解いた日本人宿泊客たちが記載してきた宿帳には、さまざまな想いが

綴られてきている。

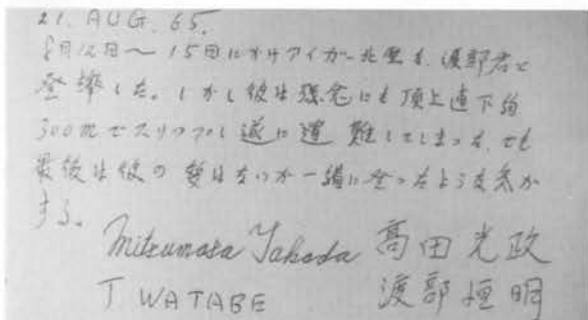
日本人初マッターホルン北壁登攀者の芳野(現姓服部)満彦氏(一九三二) (写真1)や日本人初のアイガー登攀者の高田光政氏(一九三四) (写真2)、山岳小説で知られる作家の新田次郎(本名・藤原寛人)氏(一九二二—一九八〇) (写真3)といった山の著名人がこの一冊に名を連ねる。

B. スイスの山案内人に関する資料

スイスアルプスを案内する山岳ガイドたちは、信頼に足るガイドであることの証として公式の手帳を携えている(写真4、5)。



1. ホテル・ベルビューの宿帳に残る日本人登山者の記述①
1965年7月、渡部恒明とともに日本人初となるマッターホルン北壁登攀に成功した芳野満彦が、同年翌8月に起きた渡部の遭難を受け記した。(1965. 8. 21記)

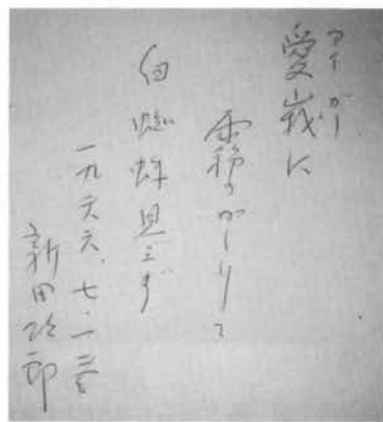


2. ホテル・ベルビューの宿帳に残る日本人登山者の記述②
1965年8月、高田光政は渡部恒明をパートナーとしてアイガー北壁登攀に挑むが、途中渡部が墜落し重傷を負う。救助を呼ぶため高田は単独で登頂(困難な北壁を下るより一度頂上へ登ってから稜線を下る方が早いと判断したため)、深夜に稜線を下り麓に救助を求める。しかし、救助を待っていたはずの渡部は墜死して発見された。宿帳の記述はこの遭難直後、高田が下山して記したものの。(1965. 8. 21記)



4. スイス山案内人に関する資料①
右の2冊はスイスのガイドが携帯する公式の手帳(ドイツ語版とフランス語版)。左はスイス山岳会(SAC)の旗とバッジ。

今回、大正から昭和にかけてスイスアルプスを登った日本人登山者たちの記録が残る手帳のコピーが寄贈された。ここには、同行した登山客からの謝辞や次回案内する登山者の推薦文などが記されている。また一方、ガイド側も客の印象などを書きとめている。



3. ホテル・ベルビューの宿帳に残る日本人登山者の記述③

作家新田次郎は、1961年から数回にわたってスイスを訪れ、『アルプスの谷 アルプスの村』『アイガー北壁』などを執筆。新田の没後、藤原てい夫人によって、アイガー北壁が見えるクライネ・シャイデックに銅版の碑が建立された。記述にある「白蜘蛛」とは、通称「白い蜘蛛」と呼ばれるアイガー北壁の頂上直下の氷壁を指している。(1966. 7. 13記)

当時名ガイドとして名を馳せたサムエル・ブラヴァント氏やフリッツ・ストイリ氏、フリッツ・アマラー氏、ベルナルド・ビネル氏の手帳には、横有恒氏や「山の殿下」として知られる秩父宮雍人殿下、一九七〇年に隊長として日本エベレスト登山隊を率いた松方三郎氏や一九二八年にウェッターホルン西山稜の初登攀に成功した浦松佐美太郎氏、一九二九年にモン・ブラン三山のひとつ、モン・モディ東南壁に新たなルート(「カガミ・ルート」と記録された)を開拓した各務良幸氏らの記述が残されている。

C、スイス製の登山用具
早くから登山がスポーツとして発展してきた本場アルプスでは、氷河や岩壁といった地形に対処するための用具も発達をとげてきた。

今回、スイスで作られた登山用具が寄贈された(写真6)。主なものを次に挙げる。
ペント製アイスピックル(「ALP-BEND GRINDELWALD」の銘あり)はアイガーの



5. スイス山案内人に関する資料②

1880年当時のグリンデルワルトの山岳ガイドたち。グリンデルワルト・ハイマートミュージアム旧蔵。



6. スイス製の登山用具

右上から時計回りに、ペント製アイスピックルと麻ザイル、ペント製シュタイクアイゼン、カラナとマウエルハーケン(うち2点ペント製)、クレッターシューズ、ウィリッシュ製ピックル、トルビ製ルックザック。ウィリッシュはツェルマットの隣村テッシュ出身のピックル職人。このピックルはピックからブレードまでが直線的で、「Jos. Willish, Taech-Zermatt」と銘があることから、初代ウィリッシュ作の一本と思われる。

ミッテルレギ小屋に備え付けられており、一九八五年まで使用されていた。シュタイクアイゼンにもペント「BEND」の銘がある。全四点あるマウエルハーケンのうち二点にはペントの銘「ALP-BEND GRINDELWALD」が刻まれており、一九三〇年から四〇年ころに使われたものという。
アルフレッド・ペントはスイス・グリンデルワルト出身のピックル職人で、初代が一八七六一年ころに創業。二代続いた後、一九九〇年ころから製造が中止された。同じく二代続いたピックル職人シェンクも同村出身である。ルックザックはグリンデルワルト出身のハンズ・ルビの手による一品。ルビは同型のザックを一九四〇年ころから盛んに製造したという。荷入れ口に蓋がなく、紐を締め上げることで口をふさぐ形のザックは「キスリング型」と呼ばれ、必要に応じて荷物を積み上げられるという利点があった。この呼び名は、同じくグリンデルワルト出身の袋物職人キスリングが山案内人たちの希望を取り入れながら、ザックを使い勝手の良い形に仕上げたことにちなむ。

このほかにも、ナイロンザイルが普及する

以前、一九五〇年代ころまで使われていた麻ザイルや、一九三〇年から四〇年ころまで盛んに使われた初期の岩登り用靴であるクレッターシューズなどの登山用具の寄贈を受けた。まどめにかえて
、当館で行なわれた寄贈記念式典の席上、スイス政府観光局(当時)ヴァーランド氏がスピーチの冒頭に述べた一節が印象に残っています。それは次のような内容でした。
「現在、スイスといえば、山と水の美しい国」というイメージを多くの日本の皆さんがお持ちになっていることでしよう。そうした良い印象を日本へ持ち帰って広めたのが、戦前から盛んにスイスを訪れてきた日本人登山者たちであつたのです。」
今回、スイスアルプスに関する山岳資料に触れることで、スイスと日本における明治・大正時代以前から続く交流の一端を垣間見ることができました。スイスアルプスの峰々と日本人登山者たちが織り成してきた歴史が、現在の両国の関係に深く影響していることは興味深いことです。

(大町山岳博物館学芸員)

西丸様御用の「入山札」(御鑑札)

— 信越連帯新道とは別物です —

大日方 健

旧加賀藩の士族と旧松本藩の庄屋が連合して峻険な北アルプスを横断、信越を直結させた「信越連帯新道」(能登塩の道)の開削は、維新の殖産事業として屈指の史実です。

この開発史の遺品のひとつとして、この博物館に展覧してきた「入山札」(御鑑札)の写真Ⅱは、その後の調査で、実は「西丸様御用」(別掲)のときの、入山札(御鑑札)であることが判明いたしました。これにより、「信越連帯新道」(能登塩の道)の開削史とは直接関係ない遺品であることが明らかとな

りました。

この入山札は、旧大町組野口村の庄屋・飯島善右衛門の子孫・故飯島一男氏が保管していたもので、縁あって大町山岳博物館へ寄託・展覧したとき、誤って「能登塩の道」開削時の「入山札」と説明してきたものと思われまます。将棋型で一札ごとに紐が付けられ、十数個を束ねた遺品です(写真)。

「西丸様御用」とは

第十一第將軍家齊の御座所であつた江戸城



「西丸様御用」に関する資料と判明した「入山札」(御鑑札)

飯島善士氏 蔵

の西丸が火災で焼失したのは天保九年(一八三六)のことでした。この復旧に必要な御用材は、幕命によって加賀藩が同藩の御締山であつた黒部山中で伐採し、江戸表へ搬出することになりました。

しかし、黒部山中に自生するネズコなどの良材を伐採・搬出するに当たり伐採人足やその食料などを、自領内で確保することは、黒部山の自然条件からして不可能なことでした。

そこで加賀藩は、松本

藩とその地元である野口村の樵や人足を多く雇い、庄屋の飯島善右衛門がその差配をしました。そのとき雇われた人たちに携行させた「身分証明書」といふべきものが、この「入山札」であつたのです。

「信越連帯新道」とは

松本藩は、往古から「北塩一偏の制」を令し、糸魚川から入る北塩以外は、法度としていました。このため、領内の食塩は、しばしば払底と高値、粗悪品にさいなむことがしきりでした。この法度に憤怒し、藩に献策した飯島善右衛門父子・二代にわたる義侠の発露が信越連帯新道だったので。明治十三年開通。日本初の有料道路で、黒部の荒れ川に刳ね橋を架けた約八キロメートルの通称「能登塩の道」をいいます。

写真のように表には、発給人「信州安曇郡野口村 庄屋 善右衛門」とあり、裏には「人足老人」と墨書されています。

(元大町市史編集室長)

訂正とお知らせ

当館第一展示室「近代登山の夜明け」コーナーにて「針ノ木新道の開発」関係資料として展示してきた「入山札」は、大日方健氏による調査によって、「西丸様御用」関係資料であることが右記の通り判明しました。

訂正するとともに、今後は同資料を「近世以前の山と人」コーナーにて、加賀藩の黒部奥山廻りと御締山に関する資料として展示することをお知らせいたします。

(大町山岳博物館)

お知らせ

このたび、当館では創立五十周年を記念し、『新・北アルプス博物誌—山と人と博物館』を信濃毎日新聞社より刊行いたしました。本書は、創刊から現在にいたる機関誌「山と博物館」の掲載文章の中から、「山・人・博物館」のキーワードによって、北アルプスの自然・歴史や博物館活動にふれた文章を厳選し、収録した一冊です。

限定三〇〇部の発行となっております。

岳都・大町を象徴する当館のさらなる飛躍にご期待いただき、ぜひこの機会にお求めください。さいますようお願い申し上げます。

【体裁】A5判・四〇〇頁・ケース箱入り

【定価】三二五〇円(税込み)

【注文方法】お申し込みはお近くの書店にてお願いいたします。ただし、長野県外の方につきましては、代金着払い(送料無料)にて発送いたします。お名前・ご住所・電話番号・冊数を明記の上、当館まで電話かFAX、またはハガキにてお申し込みください。



山と博物館第46巻第11号

発行 長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六 二二二 〇〇〇

FAX 〇二六 二二二 〇〇〇

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額 一、五〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号 〇〇四〇一七 一三九二